◀対局中の糸谷さん(写真／将棋世界)

定跡にとらわれない「面白い将棋」が身上

NHK杯で準優勝、関西期待の若手棋士は哲学の道も歩む

● 文学部　4年生
糸谷哲郎── *Tetsurou Itodani*

大阪大学文学部哲学・思想文化学専修に所属する糸谷哲郎さんは、プロ棋士としても大活躍。昨年度のNHK杯テレビ将棋トーナメント戦では、永世名人資格を持つ谷川浩司・森内俊之両九段、さらに渡辺明竜王を破り、決勝に進出。惜しくも羽生善治名人には敗れたものの堂々の準優勝を飾った。

●糸谷哲郎(いとだに　てつろう)
1988年、広島市出身。広島学院中学校・高等学校卒業。文学部4年生。98年に新進棋士奨励会入会、2004年に三段。06年に四段(プロ入り)になり、同年度の第37回新人王戦で優勝、将棋大賞の第34回連勝賞・新人賞を受賞。08年に五段。

将棋を始めたきっかけは、4、5歳のころ、テレビのニュースで「ショウギ」という分からない単語を耳にして、父に何なのかを尋ねたことだった。父にルールを教わったが、1カ月もたたないうちに父では相手にならないほど強くなった。その後は広島将棋センターに通い、道場生の子どもや大人たちと指すようになる。

「よく泣く子だったみたいです。自分はよく覚えていないんですが、当時は将棋に負けると泣いて悔しがったようです」

小学校4年で、日本将棋連盟のプロ棋士養成機関・新進棋士奨励会に入る。2006年、奨励会三段として新人王戦に出場し優勝を果たした。この棋戦中に四段に昇格、高校3年でプロ入りした。プロ初年度の06年度は公式戦で14連勝。日本将棋連盟将棋大賞の連勝賞・新人賞を受賞して、将棋ファンの注目を集めた。定跡に必ずしもとらわれず、「糸谷流」という言葉も生まれた。当時を振り返り、「自分も認知されたのかなと思った」と笑う。

07年に大阪大学に入学。現役のプロ棋士が国立大学に進学するのは初めてのことだった。大学進学については、「当たり前のことだと思っていましたし、高校でも大学に行くことが自然という雰囲気でしたから、行かないという選択肢はなかったという感じです」という。祖父が中央大学の名誉教授で、哲学・思想を研究していた影響もあって、哲学への道を選んだ。ドイツの哲学者、マルティン・ハイデガーの『存在と時間』を研究しており、すでに大学院への進学が決まっている。将棋と哲学研究が自分の中でクロスする部分はほとんどないといい、「仕事としては将棋が主ですが、自分にとっては両方が大切です」。研究室などで、哲学に興味を持つ者同士が議論できる、大学ならではの環境が好きだという。

趣味も多彩で、カードゲームやフットサルなどを楽しむ。大学に入学した時、中学・高校の先輩や同級生がいたため、大阪大学将棋部にもよく顔を出していた。今も時折は後輩の指導に当たる。箕面市で一人暮らし。時には自炊もする。食べ物の好き嫌いは特にないというが、「ショウガ、特にすしについてくる『ガリ』は苦手です」。意外に語学も弱点で、ドイツ語を猛勉強中。受験生には「語学はしっかり勉強したほうがいい」とアドバイスする。

関西若手四天王の一人として、将棋界の明日を担う。今年度は名人戦の順位戦が好調。C級2組で6勝1敗(12月現在)と、昇級に期待がかかる。棋王戦では羽生名人を破った。対局は偏りがあるものの月平均4、5回。好きな言葉は「不屈」と「自由」。目指すのは「面白い将棋を指せる棋士。自分が楽しくないと、見ている将棋ファンも楽しめないですから」と、プロ棋士の表情になった。